

環境情報伝達における、インターネットを用いた感覚的表現に関する研究
～製作者と研究者・実践者へのインタビュー調査と考察～

北海道大学大学院 環境科学院
環境起学 専攻 統合 コース
須山 哲

[背景・目的] インターネットの発展は、情報伝達の有り様を、発信者と受信者の関係、情報の形式、情報との関係など様々な点で変えてきている。センサーネットワークの拡充により、多くの一般の人々が膨大な環境データを獲得・加工・発信することが出来るようになった。また、環境科学を含む科学情報の伝達スタイルは、従来の学術論文などのような、紙媒体の文字を中心とする表現によるものだけでなく、より直感的で、心情に訴える感覚的な表現を用いた伝達スタイルも普及・台頭しつつある。本研究では、「インターネット」を用い、「感覚的表現」による環境情報伝達の可能性を検討することで、環境情報伝達のあり方を考察した。

[研究手法] インターネットを用いた感覚的表現による環境情報伝達を行った事例の中で、もっとも初期の1995年に制作が始まった事例”Sensorium”を取り上げ、制作者のうち4名の方々にインタビュー調査を行った。更にこの事例を、環境科学者や環境活動実践者を中心とする方々に評価して頂く「エキスパートジャッジメント(EJ)」を16名の方々に行った。EJもインタビュー調査によって獲得した。これらの調査で得られたデータは質的データ分析法(QDA)により分析した。

[結果・考察] Sensorium制作者の回答には「Sensoriumはインターネットの可能性を追求した活動であり、環境活動ではないが、インターネットの可能性を追求していくことで自ずと環境に関する表現や伝達につながった」という共通見解があった。研究者・実践者に対するEJに基づく分析では『環境情報を伝達する為のメディア』として、改善点がいくつか指摘された。多くの研究者・実践者から「受信者に当事者意識を与えられる工夫が必要」「情報の信頼性の担保が必要」「アートとして認識できる」「情報を伝達するにはメッセージを分かりやすく込める必要がある」「目的や詳細の説明に欠き、解釈の多義性を許す点に問題がある」「受信者の興味は惹くが、それ以上のことを求めるのであれば、別の伝え方が必要」などの意見を頂いた。ここから、Sensorium的な伝達方法をアートではなく環境情報を伝えるメディアとして機能させるには、感覚的な情報発信と学術的な情報発信の違いを踏まえて、情報伝達の仕組みを再構築する必要があるという見解が読み取れた。このほか、受信者とのインタラクションや情報の信頼性の確保、詳細情報の伝達などの課題があることがわかった。

また、Sensoriumを制作者、研究者・実践者、著者の3つの視点から、それぞれ異なる見解・評価を引き出すことができたことも大きな成果といえる。著者は「身の回りや目に見えない事象への想像力をかきたてることが環境意識の向上に繋がる」と考え、調査を始めたが、制作者はこれを環境コンテンツと捉えておらず、また研究者・実践者からは批判的な見解が多いながらも、どのようにすればSensorium的な伝達スタイルを環境コンテンツとして望ましいものとなるのか積極的な意見を頂いた。今後、EJのような手法は、環境分野のコミュニケーションや実践を多面的に評価する際に有益な手法として活用できると考えられる。